

優秀賞

心の傷に効く薬

大阪府 高橋亜月

彼女は私に言ったんだ。「もう嫌だ」と。あの時、気付いてあげれば良かったんだ。彼女の本当の気持ちに……。

この日を境に彼女は来なくなった。大好きだったはずの学校に。私は考えた。彼女が来なくなった理由を。

彼女は私に言わなかった。いじめられていたこと。悩んでいたこと。私の前ではいつも笑顔でそんな素振りは見せなかった。たぶん私に心配を掛けたくなかったのだろう。私は悔やんだ。彼女の一番近くにいたはずなのに何も気付いていなかった。彼女の心の傷に気付けなかった。寂しさが溢れてきた。一番寂しいのは彼女のはずなのに。

いつまでもこの気持ちのままいられない。私はそう思った。そして今のありのままの気持ちを伝えるため、手紙を書いた。毎日毎日学校の様子や今日起きた事、どんな些細な事でも書いた。すると彼女は必ず返事を送ってくれた。私はそこで彼女の本音を聞くことができた。毎日のように嫌がらせをされていた事、私には秘密にしていた事、手紙には時々、涙の跡が残っていて彼女の辛さを物語っていた。

それから私達は文通を始めた。私はポストを見るのが日課になった。私達の手紙には、いつも「親展」という文字が書かれていて、お互い秘密を共有してるみたいで何だか嬉しかった。

季節は秋から冬に変わる。私達の文通も、もう何カ月続いただろうか。そんな事を思いながら学校へ登校した。今日は何だかいつもより騒がしい。私は廊下を歩きながらそう思った。そして教室の扉を開けた。そこには見覚えのある姿が私の目に映った。彼女である。彼女が学校に来ている。私は夢ではないかと思った。彼女は目に涙を溜めて私に抱擁をした。両手にたくさんの手紙を持ちながら。私は彼女のその温かさに夢ではないと、気付かされたのだった。